競書雑誌 制作シェア No.1 リンクス グループ ●Web会員登録 ●Web段級検索 競書誌Web化を お手伝いします

国展覧会情報 6特別 璞社書展/新書派協会展 20分新刊案内8紙上展 道教員名鑑2/卒展情報 本号の主な記事 入学卒論一覧1G大学書 清華書道展/塁土舎展 至高の宝蔵

書道/ART/<u>文字文化/千趣万</u>香 Nº 1282/2025-3-5 Since 1979

けて研究と開発を進めてきた

e筆」が、ようやく本格的

一分の一という長い時間をか

活発に展開された。

座談会では、まず冒頭に張

自身にとっても人生の

陸中国でも書画分野での社会 な実用のレベルに達しつつあ

の萱原は、

「張さんの『e筆』の研究

発術 所聞社 新

東京都世田谷区太子堂2-〒154-0004 ☎(03)3410-810 FAX(03)6413-837 e:kayahara@kayahara.c 編集発行人 萱原 每月2回5-20日発行 ⑤ 晋

発売 (株) 萱原 (作物) 1部440円税込年10,000円 振替00150

座談会熱気張氏個展で

本社、日本版開発に協力

座談会で「e筆」を解説する開発者の張炳煌氏

種子 经成石管 穩外 器傾詞 穩並

台湾の学校での「e筆」による授業風景

を制作するためのツールとし きたわけではない。現代のこ て『e筆』を研究し開発して 同意する。私も、書画の作品 「その意見には、全面的に の、座談会に先立っての。驚一

がとても容易に使えるように

う、いわゆる『第一原理思考』 うとと だ。これを書法に当てはめた 原則を見失ってならないとい 文字を書く営為』という原理 めから終わりまで、人が手で だろうか。当然、『書法は初 場合、書法の第一原理とは何 「そういう観点に立って

だが、『AI』との関係や、対応 我々は、『e筆』はもちろん らないと思う」と発言した。 りと受け継いでもらわねばな 次世代の若者たちにもしっか においても、この原理原則を これに対して張氏も、 ョンの『e筆』アプリを持っ でも、急速に普及しつつある」 完全に対応可能な段階」「書 体練習や臨書学習のツー 筆の指導には、現状のアプリ 的な質問が次々に出た。 ら入手できるか」等々の具体 最新パージョンは、どうした ているが、『iOS』対応の 「今後、『e筆』アプリは日 しては、台湾はもとより大陸 されているか」「古いバージ

本でも無償ダウンロードがで これに対して張氏は、「硬 えた専門家会議を立ち上げ、 など、関係分野の専門家を交

固めている。 e-mail : kayahara@kay 等に関する問い合わせ等は、 対応に、本腰を入れる方針を ahara.comの、美術新聞社 完成とその有効活用へ向けた ーe筆」「AI」研究班へ。 「e筆」の『日本パージョン』 本件を含む、「e筆」「AI 任 ラ*はしっかり整っている、 氏の「e筆」の日本の教育現 ので、ということは、張炳煌 と言えるわけである。 六・五%となっているそうな で九六・二%、中学校では九 は既に二一年時点で、 タプレット等の端末の普及率

統と変革/・筆書画・張炳煌の書」が、二月十三日から三月十四日まで東京・虎ノ門の外務大臣表彰を受けたことでも知られる書法家、張炳煌の東京での初の大規模個展「伝台湾書法界の第一人者で、一昨年にはその日台文化交流に尽力した功績に対し日木の り研究開発を続けてきた「e筆」と、さらには時代を席巻する「AI」が今後、歴史と る「伝統と変革」を主題にした座談会が催された。座談会では、作者が四半世紀にわた ように対処すべきかについて、熱っぽい論議が交わされた。 伝統に支えられた書法文化・芸術にどのように影響し、また我々はこうした変革にどの 台湾文化センターで開催された。その会期中の二月二十八日、会場で、作者が問い掛け

きの実体験。を基にした突っ て発言を求められた本社代表 らチューター(助言者)とし 込んだ質問や意見発表などが そうした中で、主催者側か 面から、私はこの張さんの仕 まさに、実用レベル、に達し なったことで、その実用性は 事を高く評価している」 たと言っていいと思う。その

ている考え方なのだが、『世 を見失ってはならない』とい の中で物事がどんなに変化し に主張し、私もかなり共感し 観のイーロン・マスクが盛ん 近年米国で寵児となっている イントが一つある。それは、 複雑化しても、。第一原理は しっかり確認しておきたいボ 「その一方で私としては、

つぶさにウオッチしてきてい 開発については、最初期から

Q この『e筆』開発の願いであ ってもらいたい。それこそが、 でも多く『書法』を好きにな 者を一人でも増やしたい。 のこの時代に『書法』の愛好 に、若い世代の人々に、一人 こうした議論を受けて会場 「とにもかくにも私は、今 目的」と応じた。 特 立脚した高品質、高機能な書 化に深い造詣と幅広い知見に

前に会場の一角に設けられて

これに対し会場からは、事

いた「e筆体験コーナー」で

どのタブレットとタッチペン 末や、Android端末な を交えてパワーポイントで解 きな成果を収めつつある状況 貢献、学校教育支援の面で大 るとして、台湾はもとより大

筆」から「スマート・筆」へ るが、近年の、「デジタルe

の進化、具体的にはAPPL

iOS」のiPad端

会場のスクリーンで動画

が多かったこともあってか、 の出席者からは、教育関係者 「学校教育で、どの程度活用 硬筆の指導に利用可能か められる、 が位置する東アジアの伝統的 あることは間違いない、 法学習・書画入門のアプリで ②時代状況に照らし、 日本

会状況とは、まだ一定のミス まだ日本の学校教育の諸規定 ・マッチ部分が残る、 ・システムや日本の時代・社 の下支えに確かな有効性が認 及やスキルの向上、基礎教育 な書画・文字文化の振興・普 に教育関係者や学者・研究者 ③同アプリは現段階では、 等々の観点から、今後早急

た、全国の児童・生徒一人に省が二〇一九年に打ち出し れない。だがここで、興味深 われているかといえば、それ 現場での書写・書道の授業が、 なさそうだ。とはいえ、学校 う▼となると、これはもう時 いう文科省のいわゆる「GI い情報、データがある▼文科 は違うだろうと思わずにいら 準で筆や紙、墨にまみれて行 代の流れという説明しか出来 台、IT端末を整備すると 〇年前、五〇年前と同じ水

の無償配布も始める方針 クールなども盛んにやってい が、私の願い。そのために最 る。また、『e筆』のアプリ 近台湾では、e筆作品のコン 度を下げ理解度を上げるため スピードを速め、書法の難易 加へのバリアを下げ、 若い人たちにとっての書法参

プリが、 ことにかんがみ、 の社会・教育界をマーケット アプリが台湾現地や大陸中国 聞社では、現段階の「e筆」 関心の高まりを受けて美術新 に開発がほぼ最終段階にある ①東アジアの伝統芸術・文 こうした座談会での論議や 「食筆」ア

学校教育も、制度的にも実態 題を扱きに考えれば、人口滅 ということは、少子高齢化問 は一億二、五〇〇万人台、現本の人口の推移は、三〇年前 劣りするレベルではないだろ 人口がなぜ? 在は一億二、 の活動ぶりを続けているし、 思議に思う。書道界も高水準 は一%前後なのだから、 においても、決して過去に見 無関心ではいられ は、深い関係をも ない▼この間の日 つメディアとして 四〇〇万人台。 と誰しもが不 書道

という危機感が、その発端」 退せざるを得なくなるだろう きもされなくなり、書法は衰 り次の世代の人達からは見向 を墨守していたのでは、やは 千年の昔ながらの方法論だけ の手段、指導理念を、百年、

「従って『e筆』は、特に ければならないので、著作権 悪意の第三者の存在も考えな 等々、懇切丁寧な応答をして は放棄するつもりはない

が三〇年前の五分

日本の書道人口

の一という事態

2082 (234) 2227

社 730-4200 広島県熊野局私書函第1 2082 (854) 1145 (代)

学生部門= 全国学生書道展

中文翻譯

起於台灣的"e 筆"最高期待

GAスクール構想」のもと、

書寫學習的大援軍 / e 筆座談會上熱烈討論、本社將協力開發日本版

臺灣書法界的第一人者張炳煌,以其在日台文化交流方面的貢獻而在前年獲得了日本外務大臣表彰。他在東京的首次大型展覽"傳統與變革/e 筆書畫·張炳煌的書法"於2月13日至3月14日在東京虎之門的臺灣文化中心舉行。在展覽期間的2月28日,展覽現場舉辦了一場以"傳統與變革"為主題的座談會,作者在會上提出了"e 筆"和當今席捲時代的"AI"將如何影響歷史和傳統支撐的書法文化與藝術,以及我們應如何應對這些變革的問題,展開了熱烈的討論。

座談會一開始,張炳煌先生介紹了他花費人生三分之一的時間研究和開發的"e 筆"已經逐漸達到實用水準,並在臺灣及大陸的書畫領域和學校教育中取得了顯著成果。他通過視頻和 PPT 在會場螢幕上進行了詳細解說。對此,現場觀眾基於在座談會前在"e 筆體驗區"的親身體驗,提出了深入的問題和意見。

在此過程中,作為主辦方顧問發言的本社代表萱原表示:"我從最初就密切關注張先生的'e 筆'研究開發,近年來從'數位 e 筆'到'智慧 e 筆'的進化,特別是蘋果 iOS 的 iPad終端和安卓終端的平板和觸控筆變得非常易用,其實用性已經達到了實用水準。我對此高度評價。"他還補充道:"但我想確認的一點是,近年在美國備受關注的埃隆·馬斯克所提倡的'第一原理思維',即無論世界如何變化複雜,都不能失去'第一原理'。應用到書法上,書法的第一原理就是'書法從始至終是人用手寫字的行為'。我們在面對'e 筆'和'AI'時,也必須將這一原理傳承給下一代。"

對此,張炳煌先生完全同意,並表示:"我研究開發'e 筆'並不是為了製作書畫作品的工具。在現代這個高度化、效率化的時代,如果書法界僅堅持百年、千年前的方法論,下一代將不再關注,書法將不可避免地衰退。因此,'e 筆'的初衷是降低年輕人參與書法的門檻,加快進步速度,降低難度,提高理解度。為此,臺灣最近也在積極舉辦 e 筆作品比賽,並計畫開始免費分發'e 筆'應用程式。"他還強調:"我希望在這個時代能增加書法愛好者,特別是讓更多年輕人喜歡上書法,這正是'e 筆'開發的願望和目的。"

在座談會的討論中,教育界人士提出了許多具體問題,如"是否可以用於硬筆指導"、 "在學校教育中如何應用"、"如何獲取 iOS 最新版本的'e 筆'應用"等。對此,張炳煌先 生詳細回答道:"目前的應用程式在臺灣的教育現場還未完全適用於硬筆指導,但作為 書體練習和臨摹學習的工具,已在臺灣和大陸迅速普及。未來'e 筆'應用程式將在日本 也能免費下載,但考慮到惡意協力廠商的存在,版權不會放棄。"

鑒於座談會上的討論和高漲的興趣,美術新聞社決定儘快成立由日本國內教育界人士、學者和研究者等相關領域專家組成的專家會議,著手完善和完成適用於教育現場的"e 筆"日本版本,並積極推動其應用。

日本的書道人口在 30 年前的五分之一,這一情況作為深有關係的媒體不能無動於 衷。30 年前日本人口為 1 億 2500 萬人,現在為 1 億 2400 萬人,人口減少約 1%,但 書道人口為何減少如此之多,令人不解。書法界依然保持高水準的活動,學校教育也 不遜色於過去。因此,似乎只能解釋為時代的變化。然而,學校的書寫和書法課程是 否仍像 30 年前、50 年前那樣用筆、紙和墨進行,恐怕並非如此。

有趣的是,根據文科省 2019 年提出的"GIGA 學校構想",到 2021 年,小學和中學的 IT 終端普及率分別達到 96.2%和 96.5%。這意味著,張炳煌先生的"e 筆"在日本教育現場的引入基礎設施已經完備。